

対

談



秋田光彦 (Mitsuhiro Akita)
浄土宗大蓮寺・應典院住職、
NPO上町台地からまちを考える会
代表理事



多木秀雄 (Hideo Taki)
大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所所長

生活者にとっての減災とは

— 一人ひとりのいのちのちとつながりから

一人ひとりのいのちに向き合うことの意味を問い直し、これから起こるかもしれない災害に目を向ける。日常の暮らしや地域の環境・文化の中で何を感じ取り、伝えあい、どう連携してゆくべきなのか。

今回、生活者にとっての減災の意味を考えるため、大阪・下寺町に大蓮寺・應典院住職の秋田光彦氏をお訪ねした。そこは、上町台地の西側、南北1キロ以上にわたり25カ寺が伽藍を並べる歴史的なまち。寺院が主体となって人と地域のつながりを見つめ直す、減災への取り組みなどについてお話をうかがった。

大阪都心の松屋町筋に沿って、25の浄土系寺院が伽藍を並べる下寺町は350年の歴史をもつ(写真手前の円形の建物が應典院、写真提供：應典院)



僧侶とは何か、大震災で問いかけられたもの

多木 2010年1月17日で、阪神・淡路大震災が起ってから15年になります。人々のつらい経験と教訓を風化させることなく継承されていくことが望まれます。今回、本誌では、暮らしの中からの減災、生活者にとつての減災を考えようとしています。今日は、秋田さんたちが取り組んでおられる減災活動のお話とともに、ご自身の減災に寄せるお考えなどをおうかがいしたいと思います。その前に、ここ應典院は、大都市の中のいのちの拠点として広く知られている寺院ですが、それを1997年に再建されるに至る経緯からお聞かせください。

秋田 私は出戻り坊主なんです。生まれた寺を飛び出して、東京の大学を出て向こうで仕事をしており、30歳を前に、仏教とまともに向き合うことを始めました。しかし、当初はやはり迷いだらけでした。やがて国際協力団体にかかわり、アジアの仏教国をめぐるりましたが、そこで僧侶たちが自ら社会開発、地域開発にあたっている姿に出会いました。開発僧と呼ばれる人たちで、お釈迦様の教えをそのままいただいている上座部仏教の中に、人々を救済する、地域をつないでいく仏教があったことに目からうろこが落ちる思いでした。

多木 これまでに見たことのない僧侶の活動に接し、強い衝撃を受けられたわけですね。

秋田 タイとかスリランカでは伽藍仏教として、一つの寺に何百人というお坊さんがいる。しかし開発僧は、そういう所属をすべて捨て、鋤と鍬を持って田畑を耕すところから始めるわけです。信者が集まり浄財が寄せられて簡素な庵が建てられる。まさに日本中世の聖のような暮らしぶり。そこで、僧侶というのは一人称だということに改めて気がつきました。日本の仏教はどこにいても、どこの宗派で、どこの教団でと、「私」という固有のものにたくさんの方々がかかっている。一方、開発僧たちは単独者で生きていく。その高潔さに非常に感銘を受けました。さらに、帰国し



應典院の窓外には墓と上町台地西縁の緑が広がる

た当時は、まだバブルの残り火の時代で、特に都市部で横行したのが寺の地上げでした。この界限は風致地区ですが、そこから外れているあたりは、所々でお寺の土地が売られ、高層建築が建てられた。350年の歴史を持つ地域に残されていた歴史的事物が、そこから目を逸らした瞬間にかき消されてゆく現実を目にしたその時、寺はそこにあるだけでは寺ではなく、なぜその場になくはならないのかという、その存在理由が問われていると感じました。その答えを求め、失われていた應典院を再建しようと設計を始めていた時に、阪神・淡路大震災が起こったのです。

多木 阪神・淡路大震災とその後の復旧・復興過程は、被災された方々だけでなく、日本社会全体に貴重な教訓をもたらしました。全国から多くのボランティアが駆けつけました。このときのボランティアの活躍がその後のわが国での災害時の支援活動に影響を与えましたね。

秋田 アジアをめぐるっていた時のNGOの仲間が、大蓮寺に拠点をづくり現地の支援活動を始めました。私自身も現地の避難所に入りましたが、行ってすぐに、「あなたには、いったい何ができるのか？」と問われたのです。当時、このころのケアについては、PTSD(心的外傷後ストレス障害)などと言われて、たくさんの方の癒し手たちがやってきた。その人たちに、「あなたは、お坊さんなら、人を救うのが仕事でしよう」と。これには非常な衝撃を受けました。宗教家として自分に何ができるのだろうか。救うとか、そう軽々しく語ってきたことへのおこがましき、至らなさも感じさせられました。「僧侶とは何か。お寺とは何をやる場所なのか」ということを指弾され、揺さぶられました。

多木 そのときの大きな衝撃がその後の「防災・減災」への取り組みをはじめとする、秋田さんの地域の拠点としての活動を考える契機となったわけですね。

秋田 当時、仏教者たちの支援活動は活発でした。活動の初期は同じ宗派の僧侶が集まっていました。ところが、2月、3月になり、生活再建のための支援が主になってきた頃、頭にタオルを巻いてガウンを着た、よく知っているお坊さんが

大学生と一緒に炊き出しをしているのを見ました。子ども会の人と一緒に人形劇の慰問公演をする人、お風呂でひとり身体洗いをしていた人もいました。お坊さんたちが、宗派、特定のセクトを外れて単独者として市民と対等に協働しはじめた場面を目の当たりにしました。その時、宗教家が市民とともにあるということに、初めて可能性を感じたのです。

多木 秋田さんと同様、宗教家の方々が、阪神・淡路大震災の際に現場に行き、結構悩みや戸惑いを覚えられたようですね。これまで宗派とか、教団として行動されてきており、そこから切り離されていきなり「個人になる」ことは難しかったですよね。

秋田 実際、宗教的な言説が被災地では何も通用しなかった。

その時、実は言葉以上に求められているのは、人と人との関係性ではないかということに気づかされました。理性的・論理的なものに被われて私たちが失ってきた、身体性や皮膚感覚などによって感じ合うというよきな、相互の関係性が必要であるということ。

多木 私たちは直接感覚を働かせる皮膚の上を理性等の厚着で被って生きており、そのために皮膚感覚でその場の状況を感じ取りにくくなっていく。現地ではすべて厚着を脱ぎ捨て、訴えられていることを皮膚で直接感じ取る必要があったということですね。

秋田 自らを定義するものを捨てているわけですし、批判もされ、葛藤もありました。そのとき、「僧侶というのは悩まなきゃいけないんだ。悩むのが仕事なのだ」と思ったんです。

多木 震災の現場で同じような悩み、戸惑いをされた方々は何人もおられたかと思いますが、秋田さんはそこでの強い衝撃、気づきを應典院の再建につないでいかれた。

秋田 NGOの人たちとかかわりにおいて、すごく通底するものを感じました。救済とか支援、援助は、これまで社会福祉や医療の分野の中で括られていて、市民はお任せするというかたちになりがちです。しかし、あの震災の現場では、初めて市民が互いに力を出し合う、お金も時間も提供し、互いに人々の支え手になろうという行動が大規模に成り立った。



應典院本堂は、音響・照明施設を備えたホールとしても活用される

多木 数多くの尊いのが犠牲となった現場に向き合い、そのいのちが何かを強く訴えていると感じられたのでしょうか。

秋田 あの時なぜ、あの方たちが亡くなって、私が今ここに生き残っているのか。私たちをもう一度、人は支え合って生きるのだというところへと揺り戻していったのは、無辜のいのちからの問いかけではなかったのだろうか。私自身この震災を機にずいぶん変わりましたが、日本の社会、地域の災害時の取り組み方を大きく転換させたのが95年だったように思います。

祈りではなく、 願いをともに傾けるといふこと



多木 いろいろな再建プログラムが考えられていた應典院は、秋田さんの阪神・淡路大震災での原体験も加えられて97年に再建されることになりました。應典院は檀家さんを持たず、お葬式をしないと宣言され、一方で、若い人たち中心に、数多くの人が集まる地域の拠点にしようとされたのですね。

秋田 震災の経験により、当初の設計計画からはっきり変わったのは、ここを市民活動の拠点にするということです。私は、NPOのノウハウを取り入れてお寺を運営しようと考えました。

多木 「寺とはどういう存在か」ということを市民との関係のあり方から問い直されたということでしょうか。また、この應典院では演劇公演や現代美術の展覧会等も行われ、若い人たちがたくさん集まる場となっていますが、そのような人たちにも人のいのちについて語りかけられるのでしょうか。

秋田 今、年間3万人くらいの若い人たちがお寺に通ってくれています。ただ彼らは最初から應典院を寺だと思っただけではないのです。来てみると、1階に観音さんがいらっしやう、2階に上がるとお墓が見え、本堂ホールにはご本尊がいらっしやう。そこでお寺だとわかる

のです。でも、ご本尊を指差して、「あの人形はなんですか？」と言われたこともありますよ(笑)。また、私のことを「支配人」と言った若者もいます(笑)。

多木 来られた方々は、お寺でアートや芝居なんて、びっくりされるでしょう。

秋田 年間40以上、ほぼ毎週末演劇公演が行われています。とくに初日の仕込みはにぎやかで、役者やスタッフが続々集まってくる。舞台装置や器材を満載したトラックが横付けになる。さあ、これから祭りだという朝一番に、まず本堂ホールに全員集まってもらい、そこで住職からお話をします。私はまずこの寺の成り立ちを説明して、次いで「かつて寺は開かれた公共空間であり、人々は芸能や芸術を通じて願いを傾けたところである」と話します。「應典院はその思いを継承する、日本でただ一カ寺のお寺である。だから、みなさんの若い才能をもってここに新しい水を注いでほしい」と伝えます。最後は、ご本尊に向き合い、公演の安全と成功に、みんなで願いを傾ける。そういう小さな儀式を、何百回と勤めてきました。

多木 「願いをともに傾けましょう」と言うと、若い人たちの反応はどうですか。

秋田 とても真摯に聴いてくれます。仏教は祈りというより、願いだと思えます。絶対の神に何もかも預けてしまうのではなく、仏と向き合い、そこで育まれる関係性において救われていくという考え方です。主体は私なのです。公演前のさやかな儀式ですが、みなと同じ方向を向いて、ともに願いを傾けることによって、体ごと共感する何かが生まれます。應典院が寺であるということを実感する時です。

多木 さきほど山内をご案内いただきましたが、ホールにたたずみ、お墓に直面していると、何か見えないものとの対話ができそうな気がしますね。日々の暮らしに追われ、忙しく過ごしていると見過ごしてしまいますが、静かに考える、見えないものと対話するという時間が、少な過ぎるように思います。

秋田 ひよっとしたら、お寺とか神社の一番の社会的役割とい



下寺町の僧侶たちが企画した「防災てらまちウォーク」(2008年11月)にて会場の寺院と寺院の間を移動する参加者(写真提供: 應典院)

うのはそれなのかもしれません。よく掃き清められ、整えられ、中心になるものがある。私も、実はこのお寺は何もやっていない時の方が素顔だと思えます。何も無い、がらんどうの状態の時に、ふと見えてくる風景の立ち上がりとか、ご本尊の神々しいお姿とか、そういう感覚を、ある意味で錬磨していくために何かを積み重ねているのかもしれない。

「減災」との出会いと大きな気づき

多木 上町台地は、有数の規模の都市型断層「上町断層」に並行する位置にあります。秋田さんは付近のお寺に呼びかけられ、減災について学んでいこうという取り組みをされていますね。08年11月には、「防災てらまちウォーク」というイベントも実施されました。

秋田 阪神・淡路大震災の時、寺の役割を考える間もなく、神戸のお寺は大半が壊滅状態でした。辛うじて生き残った寺は、避難所になり、ご遺体の安置所になっていました。それから今度はボランティア拠点になりました。

多木 上町台地にも寺院がたくさん並んでいます。地震が発生した時にはそれら寺院は何ができるのか、何をしておくべきかを考えられたのですね。

秋田 上町断層が動き、直下型の地震がきたら、寺は壊滅し、できることは何もないのかもしれませんが。寺側も本堂の消火訓練はしたことがあるものの、以前は、「地震が来たら、しようがない」という話になっていました。「防災てらまちウォーク」は、そこへ私がかかなり強引に課題を投げかけた面もありました。初めは僧侶たちや外の協力者たちも、「なんでお寺が」という雰囲気でした。それが半年近く準備を重ねていくうち、「だからお寺だ」と納得してゆきました。そのキーワードが「減災」という言葉だったのです。

多木 「防災」ではなく、「減災」という言葉が接点を生み出したということですね。本当は「減災てらまちウォーク」だったのですね。



秋田 思案しましたが、「減災」がまだ一般的でないので「防災」にしました。防災と言うと、救命、救援とか救助ということが頭に浮かびます。そこには、行政や消防隊や地元の救助隊の人等、そのために頑張ってくれる人たちの役割論の中に取まっていくところがある。結局、他人任せになるように思うのです。私自身も「減災」という言葉に出会って、はじめて接点が見えてきたように思います。「減災」というのは、一人ひとりの生き方であり、そして一人ひとりと地域の問題でもあるのです。この寺町を「防災」で括ると「よく燃える木造建築が並んでいるけれど、仏像や宝物は何とか保護しないといけない」で終わってしまうのを、「減災」という言葉を当てることによって「なぜ寺町が350年も前からここにあるのか」「なぜここに井戸があつて、人々にとつて恵みの水源となつてきたのか」というような物語が再生してきました。

多木 「防災てらまちウォーク」には一般から40人ほどの参加者がおられたそうですが、このイベントにおいてとくに力点を置かれたのはどういうことでしょうか。

秋田 下寺町の6つのお寺をめぐるながら一日がかりのイベントでした。各寺院の住職や副住職が人前に出てきて、とにかく自分の言葉で語りかけました。半年くらい勉強をし、「減災のために何ができるのか」「災害が起こったときはどう受け止めるのか」など、たどたどしくも自分なりの課題について語ったことで、寺町の歴史が一人ひとりの語り口で伝わっていきました。僧侶が語る相手は「檀家」ではなく、「市民」だったことが重要です。

多木 なるほど。「減災」という言葉には、きつと、それがなければ接点を持ちえなかつた人たちを引き合わせていく力があるということですね。このイベントを通じてそれぞれのお寺のお坊さんと参加された市民との距離も縮まつたのでしょうか。



「防災てらまちウォーク」の各会場では、(写真左から)「寺はいのちの広場となりえるか」[應典院]、「体験! 避難所はどうするの?」[源聖寺]、「いのちの水をたずねて」[幸念寺]など多彩な企画が展開された(写真提供: 應典院)

秋田 今も井戸があるお寺では、実際に見学し、水を汲み、水質を調べ、またその水を使ったバケツリレーなども体験しました。あるいは非常食をつくって食べ、あるお寺では、お堂を避難所に見立ててシミュレーションし、真つ暗な場所で、顔を知らない者同士が「さあどうしようか」というロールプレイをするなど、それぞれ独自性のある内容を企画して実施しました。ゲストを招いてのトークや法話、詩の朗読なども行われ、多彩な内容でした。

多木 一般的なマニュアルではなく、寺町の資源を活かし、そこにあるお寺と市民とが協働した取り組みであつて、まさに地域の固有のものが、災害による被害を軽減するのに力を発揮してゆくのだと思いますね。

秋田 「防災」と「減災」の違いは、それぞれ、映画で言うところのカメラワークの「寄り」と「引き」のように思っています。「防災」は対象物にカメラが寄つていき、「減災」は逆に引いていく。寄つていくほど集中度は高くなりますが、周囲のものは画面から外れて消えていきます。引いていくと、周囲のものが画面に入つてきます。そうすると、登場人物の背後には木立があり、その向こうには大空や雲があるのだということがわかってきます。言い換えれば、私たちの現在地点を確認すると同時に、その私たちを過去から支えてきたものは何だったのかということを示してくれるのが「減災」という言葉だと思います。「防災」が西洋的な問題解決型の手法を示すのに対し、「減災」は、自然や風土によって私は生かされているという日本人特有の精神性を感じさせます。

多木 私たち人間は地球上に、自然とともに生きています。自然に包まれて私たちの生活があります。その自然を制御しようとするのではなく、自然と上手に折り合いをつけて生きていくことで自然災害による被害を小さくすることができるといふことですね。そして、そうすることが、私たちの生活が末長く持続可能であることにもつながるといふことを示唆しているようです。

地域社会の再生とつながりの可能性



秋田 長い年月の間に蓄積されてきた時間資源や智慧は大切なものです。知識を智慧にしようとするには時間が必要です。専門家に頼る前に、自分自身で知識や情報を読み直してゆくことがないと、智慧は生まれません。先ほどからお話している「減災」力は個人の中だけで完結するものではなく、種々のものとの関係性の中で編みあげられてゆくのです。それは、自然、地域の資源や他者との関係性の中で編みあげられてゆくもので、その時に必要なものは、哲学、芸術、宗教などによる共生の感覚だと思います。これまでは、まちづくりを考える際にも、経済振興とか、集客すれば地域が活性化するという図式でした。今後は、そうではなく、まちに対する愛着、地域に対するプライドとか、人間が持っている感覚や感性によって知覚されてゆくものの方を重視すべきだと思います。

多木 人と人、そして人と地域とのつながりによって減災社会を考えていけないといけませんね。災害の際により強い影響を受けることになる高齢者や病気を持っている人等の目線で減災社会を考えてゆくことも大切だと思います。また、地域のどこに誰が住んでいて、どのような場所があつて、どのようなリスクがあるのかということ把握していることも大切です。それは、地域社会をどう再生させてゆくのかということにも



秋田 光彦 (あきた・みつひこ)
浄土宗大蓮寺・應典院住職

1955年大阪市生まれ。明治大学卒業後、情報誌編集や映画制作を経て、31歳で浄土宗教師に。97年應典院を地域創造拠点として再生。NPOやアートセンターとして年間3万人の若者が集まる。スピリチュアリティや死生の視点から、アート、教育、ケア、まちづくりなどに取り組み、医療専門家と在宅ホスピスのネットワークづくりも進める。上町台地からまちを考える会代表理事、パドマ幼稚園園長、アートミーツケア学会理事。共著に『生命と自己』、『地域を活かす つながりのデザイン』など。

多木 秀雄 (たき・ひでお)
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所所長

1976年京都大学大学院工学研究科修士課程修了。同年大阪ガス株式会社入社。1976～2000年供給部門、企画部に在籍。81～83年Cornell University(米国)大学院留学、修士課程修了(MSc)、91～95年The Royal Institute of International Affairs(Chatham House; 王立国際問題研究所、英国)派遣(客員研究員)。2001～04年開発研究部、技術戦略部知的財産室長、04年京都市サードパーク株式会社常務取締役を経て、07年から現職。研究領域は、エネルギー、環境分野。

つながってゆきそうです。「減災」というテーマにより私たちが再考しなければならぬ課題はたくさんありますね。

秋田 本場に必要なのは、地域の人々をつなぐための、智慧、スキル、人間同士の生き方の基盤となるような哲学だと思えます。お釈迦様は、生まれてくること、老いること、病むこと、死ぬことを「四苦」であるとおっしゃった。苦と私たちはどう折り合いをつけながら生きてゆくのか、弱さや悲しみを出発点にしながら、けれども弱さからいかに私たちは共生の力や絆の力を汲み取ってゆくのか。それがこれからの減災文化をとらえる視線になると思います。

多木 そうしたことも踏まえて、「いのちの拠点」「まちづくりの拠点」としての應典院の今後の活動を展開してゆかれるのですね。

秋田 地域が自立してゆくために大事なことは、地域の中で、本当の意味での支え合い、助け合いが担われてゆくことだと思います。自立しながら互いに支え合う地域社会を実現するため、今はエンディングサポートに関心を持っています。これは、人生終盤の諸問題についての相互の支え合いのこと。今一度、生老病死をとらえ直すことに、在宅ホスピス支援などを通して取り組んでゆきたいと考えています。

多木 應典院を中心とした、人と人、人と資源のつながりによる新たな取り組みに期待しております。長い時間ありがとうございました。

CEL



2010年1月、應典院では恒例の「コモンズフェスタ」を開催する。減災関連のイベントでは、1月16日から31日まで「ことば供養」を実施。31日のイベントには秋田光彦氏も参加する。

詳しくは <http://commonsfesta.blogspot.com>